



有斐齋弘道館
再興10周年

有斐齋弘道館再興十周年記念

勸進

新 淇 劇

しんきげき

令和二年(二〇二〇)二月二十四日(祝)

午後二時開演

(午後一時開場／午後四時三十分終演予定)

金剛能樂堂

有斐齋弘道館再興十周年記念公演 勸進「新〈淇〉劇」によせて

平成二十一年に再興されました有斐齋弘道館は、十周年の時を迎えました。有斐齋弘道館は、江戸時代の儒学者・皆川淇園のもと、全国から門弟三千人が集った場所です。

十年前に取り壊しの危機に遭い、有志により一時的な保存がなされ、その後、数寄屋建築と庭を再生させて、茶や能や書画といった日本文化を体感し学ぶ「現代の学問所」として活動を続けてまいりました。

京都では、人々が寄り合い、その縁が重なって、有形無形の文化が生まれてきました。

その一つの拠点であった有斐齋弘道館の建物と庭、そこから生まれた日本文化を後世へとつなごうとする思いを共有する場をもたせていただきました。

上演いたします勸進「新〈淇〉劇」は、弘道館ゆかりの有志が集まって創られた、異分野の表現が溶け合った新作劇です。

よろしくご高覧いただき、今後とも変わらぬお力添えを賜りますよう、お願い申し上げます。

有斐齋弘道館再興十周年記念実行委員会

勸進（かんじん）とは

勸進という言葉は、もともと仏教の僧侶が仏の教えを説くことを言う、かんげ勸化かんじょう勸請から発しています。各地で説法をして寺院・仏像などの新造、修復のため寄付を集めた僧侶には、奈良時代の行基、平安時代の空也、東大寺を再建した重源が知られています。また、琵琶法師が『平家物語』を語り寺社の改修費用を集めたことや、勸進能、勸進相撲など、勸進は芸能と深く結びついています。勸進は、有料で芸を見せる最初でもありました。

プログラム

一、ご挨拶 林宗一郎（有斐齋弘道館再興十周年記念実行委員会代表）

二、講義「京の江戸時代と弘道館」

講師 廣瀬千紗子（同志社女子大学名誉教授 公益財団法人有斐齋弘道館理事）

三、鼎談「新〈淇〉劇できました！」

登壇 廣瀬千紗子 有松遼一（「新〈淇〉劇」作者） 濱崎加奈子（有斐齋弘道館館長）

四、勧進「新〈淇〉劇」

有斐齋弘道館再興十周年記念 勸進「新〈淇〉劇」

現代の弘道館、淇園のいた江戸時代、未来からの神の来現、と、異なる次元の人々の思いが織り成す創作劇です。淇園の漢詩や実際の逸話に取材したり、狂言囃子と謡との掛合など、音楽の手法も試みています。

劇中で立てられるのは、竹（淇園という言葉には竹という意味がある）。竹は、その節々で世を繋ぎ、また断つことで未来を創り出す^{つよ}到さも表しています。

奇縁により結ばれた、過去・現在・未来。
（有松遼一）

あらすじ

物語は、令和、江戸、未来の時間軸が交差して進みます

令和

ときは令和。男が現れ①、皆川淇園と弘道館を紹介する。篠笛②の音色の中で、弘道館の館長（珠寶）が花を立てている。最後の一輪、というところで、能の笛・能管③が交差する④。

江戸

江戸時代。弘道館に住む猫（茂山逸平）は、皆川淇園（有松遼一）がふさがちなことが心配である。淇園は、自分の学問所・弘道館の行く末が不安にならないのだ。そこへ客人（茂山宗彦・鈴木実）が登場。階（きざし）④を上がって舞台へ。博学な淇園に、漢詩の添削、骨董鑑定、茶室の名前をつけてほしいと頼む。気乗りのしない淇園に、客人は酒をすすめ上機嫌。茶室の名をもらって陽気に帰ってゆく⑤。残された淇園は、ひとり眠りにつく。

未来

淇園の夢の中に、未来神（林宗一郎）が現れて⑥「汝の思ひを継ぎしものの精魂なり。淇園に未来を見せんと、夢の中に現れ」とい、未来の弘道館が多く芸道・文化創生の場となっていることを謡で伝える。

へ庭は俄に光満ち。庭は俄に光満ち。さもきらびやかな衣を翻し。匂ひ満ちくる乙女の姿。弘き道の。学びを見れば。花も香ばしく。鬢艶やかに。松風聴けば。茶の心あり。一座建立の。能ある舞曲も。衆人愛敬の。書を書くならば。笑ひ咄も講ずる声も。ちかかぼんちかかぼんと。みな言の葉の。万物を開きつつ。森羅万象の響きは道なり。あらありがたの御事やな。⑦

猫に撫でられて目覚める淇園。夢に現れた未来神のお告げのおかげで、迷いは晴れ、猫に、弘道館の門を開くよう命じる。

再び、冒頭の男。令和の弘道館に、淇園の志が受け継がれていることを喜ぶ。そこに猫がやってくる、滑稽なやり取りの末に、男の正体が明かされる。

再び篠笛の音色。弘道館館長が最後の一輪の花を立てる。⑧

へこの花の機縁とて。思ひは永遠にありあけの。影も匂へる庭の面。心の花も。

笑ひままだに見し夢も。はら白々と明けぬべき。弘き道なる。奇縁かな。弘き道なる奇縁かな。⑨

◆出演者

館長	珠 寶	桂 吉坊
皆川淇園	有松 遼一	
淇園の猫	茂山 逸平	
客人	茂山 宗彦	
	鈴木 実	
未来神	林 宗一郎	

篠笛	太田 達	
笛	森田 玲	
小鼓	杉 信太郎	
大鼓	大倉源次郎	
太鼓	谷口 正壽	
地謡	前川 光範	
	田茂井廣道	
	松野 浩行	
	河村 和晃	
	河村浩太郎	
	河村 和貴	
後見	樹下 千慧	

◆制作

構 成	林 宗一郎
作 詞	有松 遼一
作調協力	大倉源次郎
ピーチク	茂山 逸平
パーチク	桂 吉坊
衣装協力	鷲尾 華子
学術協力	松田 清

芸能と謡のエッセンスが詰まった「新〈淇〉劇」の読み解き方ガイド

- ①落語家の桂吉坊が、橋掛かりから登場。能舞台の橋掛かりは、舞台とあの世をつなぐ意味を持つ。
- ②篠笛と能管・篠笛は祭や歌舞伎をはじめとする三味線音楽で演奏される横笛。能の笛・能管も同じ横笛で、異界に導くような高音に特徴がある。劇中では篠笛の音色が「現在」を、能管が「過去」の時間をあらわす。
- ③時空交差…能管と篠笛の、ふだんはありえない重層が聴きどころ。能舞台ではどんちようや照明で場面転換をしない。二つの音が混じること、舞台上の時空が歪んだ、と想像してほしい。
- ④階（きざし）…白洲から能舞台へかかる階段。普段使われることはない。
- ⑤この時、狂言羯鼓（かつこ）と謡を交互に掛け合う。現行の能には例のない、音楽的な初挑戦が聴きどころ。
- ⑥夢の中に現れる未来神…能の構造「夢幻能」では、ワキの夢の中に、過去から霊が現れ、ありし日の思いを語る。ここでは未来から神様が現れるという画期的な「未来能」バージョン。
- ⑦謡に、弘道館にまつわる言葉がちりばめられている。
- 「庭は俄に光満ち」＝「庭（には）」と「俄（にはか）」の頭韻。「弘き道の学び」＝皆川淇園の学問所・有斐齋弘道館の学び。「花（立花）」「香ばしく」（香道）、「鬢艶やか」（花街）、「松風」（茶道・能楽・薫物・和菓子）、「一座建立」（茶道・能楽）、「書」（書道）、「笑ひ咄」（落語）、「講ずる声」（講談）。「衆人愛敬」＝世阿弥『風姿花伝』「この芸とは、衆人愛敬をもて、一座建立の寿福とせり」にちなんでいる。「ちやかかぼん」＝彦根藩主・井伊直弼のあだ名で、江戸時代に興隆した「ちや（茶）」「か（和歌）」「ぼん（鼓・能楽）」のこと。「みな言の葉の万物を開きつつ」＝淇園の学問「開物学」にちなんで。（左頁のコラム参照）
- ⑧能の《邯鄲》に描かれる「炊の夢」のように、これまでの物語は、弘道館館長が、花の一輪を立て終えるまでの、一瞬のことだったかのよう。
- ⑨謡に、弘道館の未来を祝う言葉がちりばめられている。
- 「この花の機縁とて」＝「機縁」と「淇園」の掛詞。舞台上に立てられている花の中心は、竹（淇園）。「永遠にありあけの」＝「永遠にあり」と「有明の影」の掛詞。「影も匂へる庭の面」＝「匂へる（には）」と「庭（には）」の頭韻。「匂ふ」は映える、ほのぼのと明るい、花がつややかに美しく咲く、魅力が内部からあふれ出るようにうるわしいということ。有明の月影に白く照らされた庭が、花びらを敷き詰めたくうに白く輝き、満願開花の夢の夜は白々と明ける様子を謡っている。「心の花」＝美しい心や風情を解する心、また喜びや念願がかなう晴れ晴れとした思いのこと。「笑ひままだに見し夢」＝「花の笑み」は花が美しく咲き開くこと。「弘き道なる奇縁かな」＝弘道館の「奇縁」と「淇園」の掛詞。



林宗一郎
はやし そういちろう

私が演じる「未来神」は、弘道館をめぐる各時代の、人だけでなく庭とか、土地の神様、精霊が人間の形になつているといえます。未来に自分の意志を受け継いでくれている人がいるかどうかはわからないけれど、未来で受け止めた者は過去にむけて、その思いを発信することが大切なのだと思います。

昭和54年生まれ。能楽師観世流シテ方。父・十三世林喜右衛門、及び二十六世観世宗家・観世清和に師事。市川海老蔵特別公演「源氏物語」他にも出演。有斐斎弘道館で「能あそび」を開催。



桂吉坊
かつら きちぼう

僕ら落語家は登場人物もできるし、ストーリーテラーもさせていただける。登場人物の一人ではあるけれども、ちよつとお客さんに近い立ち位置かもしれないね。僕らは最終的に見てもらいたい景色は決まっているけど見せ方はその時々。今回は舞台上で、僕が出てきたり役柄が出てきたり、また引つ込んだり。そんな演出も楽しんでいただけたら。

昭和56年生まれ。落語家。桂吉朝に入門。大師匠・桂米朝のもとで内弟子修業。古典落語を中心に舞台を重ねる。平成23年咲くやこの花賞大衆芸能部門受賞。平成30年度国立演芸場花形演芸大賞金賞受賞。



有松遼一
ありまつりょういち

皆川淇園の思いを軸に、過去・現在・未来の三世が交錯します。時は違っても、文化の心根は時空を超えて共有される。それを各芸能の技や、花や庭、自然が教えてくれる舞台です。盛りだくさんの新趣向をしつかり支える要となりたと思います。皆様の重なる思いを受け止めて。淇園の劇のようで、実は淇園はワキなのです。

昭和57年生まれ。能楽師ワキ方高安流。谷田宗二郎師・飯富雅介師に師事。京都大学文学部卒業、同大学院博士課程(国文学)研究指導認定退学。同志社女子大学非常勤講師。



茂山逸平
しげやま いっぺい

親戚に面打ちがいます、「今度、猫の面をつくるんで、そんな狂言ない?」。その面が来た時に、「新(淇)劇」の話が来ました。狂言に猫は出ないので、今回の猫はオリジナルです。そして、舞台全体が、弘道館に見立てられているわけです。吉坊さんとのやり取りでは、歩みよりすぎずに、いい感じの違和感を大事にしたいですね。

昭和54年生まれ。大蔵流狂言師。父および祖父故四世茂山千作に師事。茂山正邦(現千五郎)、茂山宗彦、茂山茂、茂山童司と共に「Cutting Edge KYOGEN」を主宰。平成23年京都市芸術新人賞受賞。



森田玲
もりた れいこ

篠笛は祭の中で育まれてきた竹の横笛。透明で美しい音色と華やかな指打ち音が特徴。日頃は演奏会形式の舞台が多く自身の篠笛を主張することが多いですが、今回の役割は物語の中の雰囲気づくり。場を読みつつこまめに篠笛らしい音の魅力をお伝えできるかの挑戦。能管との音の違いにも注目いただければ。

昭和51年生まれ。玲月流初代篠笛奏者。(株)篠笛文化研究社代表。京都大学農学部森林科学科卒。京都市芸術文化特別奨励者。文化庁芸術祭新人賞受賞。著書に『日本の祭と神賑』(創元社)。有斐斎弘道館で祭の講座を担当。



大倉源次郎
おおくら げんじろう

伝統芸能は、不変定番のようですが、先人たちがいろんなことをやってきたトライの結果。復曲や新作は、普段、当たり前に行っていることを見直すきっかけになる。今回は能でないジャンルの方と共演ですが、絶えず能だけでやるという時には、これらの要素を能に置き換え、取り込んで行くことを考えるのが良い刺激です。能は、昔からいろんな要素を取り込んできた、良い意味のブラックホールです。

昭和32年大阪生まれ。能楽師小鼓方大倉流十六世宗家。平成29年人間国宝に。著書に『大倉源次郎の能楽談義』(淡交社)。



花士珠寶
(はなのあ) しゅほう

お花をするときは、いつも真っ白になつてやらせていただきます。何もない花瓶に花が一本立つた時点で、お客様には目に見えない余白に、気配がワッと意識させられるような...それが植物の持つ力だと思ふ。今回、森田さんの笛の音色とともにお花を立てますが、この物語に、音やお花の持つ力を感じて、初と最後にもつてきたのは、なるほどな、と。

慈照寺(銀閣寺)にて初代花方を務める。平成27年に独立し、草木に仕える「花士」として、大自然や神仏、時、ひとに花を献ずることを国内外で続ける。青蓮舎花朋の會を設立。京都造形芸術大学美術工芸学科客員教授。



鷺尾華子
わしお はなこ

未来神の天衣を担当致します。弘道館にまつわる時と人の思いが交差する中、そこに現れる神は、浄土の天人あるいは精霊のような存在。未永く弘道館を見守り、その繁栄を祈念する力を体現しています。時間のグラデーションを藍の濃紺で表し、頭上に浮かび上がる衣の動きで祈りの力を表しました。藍の色が時を経て更に鮮やかに、このご縁が後世さらに輝きを増しますように。

衣裳家・服飾デザイナー。京都造形芸術大学非常勤講師。日本の服飾の伝統を独自の視点で引き継ぎながら舞台や儀式などの衣裳制作を手掛ける。

皆川淇園と

交流した、

江戸の文化人たち

三人で漢詩の同人「三白社」を結社

柴野栗山 (1736-1803)
儒学者。紫宸殿の聖賢障子図を考証

赤松滄州 (1721-1801)
儒学者。寛政異学の禁を非難した



皆川淇園

みながわきえん (1734-1807)
詩文や書画にも優れた儒学者で、各地から入門した門人は三千人といわれる。晩年に開いた学問所が弘道館。「有斐斎(ゆうひさい)」は淇園の号のひとつ。

富士谷成章 (1738-1779) 国学者
兄弟

清田澹叟 (1719-1785) 儒学の名家
親友

松浦静山 (1760-1841) 肥前平戸藩主
門人でパトロン

3人で仲良く交流

木村兼葭堂 (1736-1802)
大坂(阪)の文人、博物学者、蔵書家

長沢芦雪 (1754-1799)
画家で応挙の高弟。淇園の書画会の常連

上田秋成 (1734-1809)
『兩月物語』で知られる読本作家、歌人、茶人、国学者、俳人

呉春 (1752-1811)
画家。四条派の祖

円山応挙 (1733-1796)
近代京都画壇の祖。淇園から賛識語、序文をもらう

六如庵慈周 (1761-1801) 学僧、漢詩人。淇園が跋文を寄せる

妙法院宮真仁法親王 (1681-1695) 身分を問わず文化人・知識人を招いてサロンを形成

妙法院のサロン

書画を通じ交わる

池大雅 (1723-1776)
南画家、書家。淇園から序文、跋文をもらう

与謝蕪村 (1716-1784)
江戸俳諧の巨匠、画家。淇園から賛をもらう

浦上玉堂 (1745-1820)
文人画家で七弦琴の名手。淇園が琴譜に序文を寄せる

『十便十宜図』(国宝)を競作

大典頭常 (1719-1801)
相国寺の禅僧で漢詩人

禪の教えを伝える

伊藤若冲 (1716-1800)
当時の名工録『平安人物誌』に、円山応挙の次に登場

江戸時代の京都で、美術や芸能、学問の世界をつなぐ知のネットワークを形成していた皆川淇園の幅広い人脈から、『皆川淇園文集』に名前が上がっている有名人たちのごく一部をご紹介します。

淇園を中心に生まれた、江戸時代 京都の知のハイブリッド

廣瀬千紗子(同志社女子大学名誉教授)

雑学、遊びが知のハイブリッドを生み出す

皆川淇園は博学なことでも知られていますが、江戸時代には多方面に好奇心を発揮し、多くの号を名乗った人もいます。ジャンルを横断し、異分野交流がさかんだったので、ここから思わぬ知のハイブリッドが生まれるわけです。

ハイブリッドといえば、淇園は学問のほかに1792年から1798年までの春秋、合計14回主催した書画会、「新書画展観」が注目されます。円山の料亭、也阿弥に文人が作品を持ち寄って競いあいました。「席画」という、その場で描くライブあり、合作あり、宴会ありの賑やかなイベントで、これが日本で最初の展覧会です。こうした遊びが文化を生み出したことでしょう。

淇園の知の結晶「カイブツ学」とは？

淇園の学問の代名詞のようにいわれる「開物学」は、あまりにも独創的すぎて、専門家でも「難解でよく分からない」という複雑怪奇(?)なもの。まず「開物成務(かいぶつせいむ)」という言葉が中国古典の『易経』にあって、人知を開発して事業を成就させる、つまり開物とは知を開くこと。ではどうやって知を開かれるか。淇園は知の根元に戻って考えました。人は言葉で意味を理解する。言葉の元は音声である。上古の人は私的な先入観なく、世界をありのままに感じて体内から声(「声気」)を発した。その声気が運動する構造を可視化しようとして、易の陰陽(十二律・七音を複雑に組み合わせ、音韻図を描きました。これが超難解。淇園の門人も悪戦苦闘しています。ちなみに、七音(七声とも)とは「宮・商・角・徴・羽・変徴・変宮」の七音で、現在の雅楽などに用いられる音階です。淇園は、文字より音声に意味があると提唱したのではないのでしょうか。澄み切った囃子の音もまたしかりです。

詳しくは、淇園研究の第一人者、浜田秀先生の御論文をお読み下さい(近世京都学会機関誌『近世京都』第三号)。



「都林泉名勝回会」巻之二円山安養寺瑞之寮「東山第一楼」
東山第一楼は、淇園らがよく集った場所の一つで、現在の円山公園のなかにあった料亭。三階で永田観鷲(ながたかかんが)が大字を描いている。当時の書画会の様子がよくわかる。

門規

- 一、諸門人学業致_二勤習_一候儀、専躬行を慎み、浮薄に不_レ流様可_二相心得_一事、
 - 一、常に戒_二多言暴躁_一可_レ尚_二恭遜_一事、
 - 一、受業未熟之輩、対_二異学之徒_一、不_レ可_レ為_二誇詡_一、但、同志研竅之儀者可_レ為_二格別_一事、
 - 一、註解は聖人の本意にあらず、依_レ之経書釈義刊行之儀かたく禁_レ之、但、自備_二遺忘_一之類ハ可_レ為_二格別_一事、
 - 一、於_二経術取扱候上_一、軽卒に我意をたてず、從_二師説_一可_レ申、但、後々於_二経文発明有_レ之候者_一、校合之上可_レ從_二其善_一事、
 - 一、総て著述刊行之儀、学塾へ差出し、一覽之上從_二指揮_一可_レ申事、
 - 一、同盟之士、互に和氣を以て相待、争諍有_レ之まじく候事、
- 以上七条

上方藝文叢刊5 名家門人録集（上方藝文叢刊行会）

「皆川淇園門人帳」より

門規

- 一、みな門人は学業に勤しむこと。独断専行を慎み、軽薄な行いをしないよう心得ること。
- 一、常におしやべりや騒がしい振る舞いを戒め、相手を敬いへりくたすること。
- 一、入門が浅く未熟な者は、異なる学問の者に対して、誇りおごつてはいけない。但し、同門で研究する場合は、意見を切磋琢磨させること。
- 一、注釈は孔子本人の言葉ではない。よって儒教書解釈本の刊行は固く禁ずる。但し、自分の備忘のための記録は懸命にすること。
- 一、四書五経の研究においては、軽率に私説を立てず、師匠の教えに従いなさい。但し、後々解釈で新しい考えが浮かんだ者は、他説と比較検討の上、正しい考えに従うこと。
- 一、すべて著述物を刊行する時は、学塾へ提出し、確認をとつて師の指示に従うこと。
- 一、同じ志を持つ門人同士、互いに和氣霽々として、争い合わないこと。

有斐齋弘道館
再興十周年記念
実行委員

林宗一郎
有松遼一
伊藤恵
上杉遥
蔭山陽太
桂吉坊
亀田真司
川尾朋子
河原司
佐野英二郎
沢田眉香子
茂山逸平
珠寶
高橋 マキ
尚鈴
中村知古
森田玲
鷺尾華子